




論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏名	坂口 公太
学位論文名	Evaluating ChatGPT in Qualitative Thematic Analysis With Human Researchers in the Japanese Clinical Context and Its Cultural Interpretation Challenges: Comparative Qualitative Study	
学位論文審査委員	主査	深見 達哉 印 
	副査	河村 敏彦 印 
	副査	加藤 太陽 印 

論文審査の結果の要旨

質的研究は、患者や医療者の主観的な経験を深く理解するために不可欠な手法であるが、膨大な逐語録の解析には多大な時間と労力を要することが課題となっている。近年の生成 AI 技術の発展に伴い、大規模言語モデル (LLM) の質的研究への応用が期待されているが、特に日本のような独自の文化的背景を有する臨床現場において、AI がどの程度妥当な解析を行えるかについては十分に明らかにされていない。本研究では、日本人医師を対象とした「臨床現場における神聖な瞬間 (Sacred Moments)」に関するインタビュー30 例の逐語録を対象に、生成 AI (ChatGPT) と複数の人間 (熟練した質的研究者) による主題分析 (Thematic Analysis) の結果を比較検証した。分析の結果、AI は主要なテーマの抽出において人間と 83%以上の高い一致率を示し、特に頻出する記述的テーマの特定において高い実用性を有することが示された。一方で、日本固有の文化的文脈や情緒的なニュアンス (「言葉にできない経験」や「運命」など) に関連するテーマにおいては、一致率が 30%未満に留まり、AI 単独での解析には限界があることも定量的に浮き彫りにした。また、本研究は質的研究の厳密性を担保する「Trustworthiness」の基準を遵守しており、AI の回答の再現性確認や、同一プロンプトによる複数回試行を通じた一貫性の検証を行うことで、手法論的な妥当性を高く維持している。生成 AI を質的研究に導入する際の有用性と限界を、日本の臨床文脈において初めて学術的・定量的に示したものであり、今後の医学教育および臨床研究の効率化と質向上に寄与する価値の高い研究であると思料され、博士 (医学) の学位授与に値するものと判断した。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

最終試験において、申請者は自身の研究内容と学術的位置づけを的確に説明した。質的研究方法論の観点から研究の意義と限界を理解し、質疑にも論理的に応答しており、本分野に必要な学力水準に達していると判断する。

(主査:深見 達弥)

質的研究におけるテーマ抽出は高度な熟練と多大な労力を要する。本研究は、日本語の記述を対象とする質的研究へのAI活用を検討し、有用な知見を得た。申請者は豊富な知識と考察力を兼ね備え、発表ならびに質疑応答も的確であった。よって、本論文は学位授与に値する水準に達しているものと認められる。(副査:加藤 太陽)

本論文は、日本の臨床現場における質的データを対象として、生成AIを用いた主題分析の有用性と限界を検討した研究である。AIの活用可能性を示す一方で、文化的文脈や解釈主体の重要性といった課題も整理されており、探索的研究として一定の意義を有すると判断した。今後の方法論的発展が期待される内容であり、学位論文として妥当である。(副査:河村 敏彦)

(備考) 要旨は、それぞれ400字程度とする。